

AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

皮膚病診療 (2007.06) 29巻6号:736～737.

office dermatology
アンケート特集
私と地域医療
辺地における皮膚科医療
水元俊裕

辺地における皮膚科医療

水元 俊裕

(旭川厚生病院地域医療科)

「地域医療」という言葉に腹立たしさにも似た感じをもっています。といいますのは、この言葉のもつ意味からいって、都会であろうと、田舎であろうと、そこで行われている医療は「地域医療」でありましょう。けれども、これまでの私の受取り方は「辺地」または「過疎地」における医療と理解しておりました。皮膚科医になってからの約30年間、私は札幌市、旭川市で過ごしてきましたので、「地域医療」とは無縁の医師生活でした。それが突然、「地域医療」実践の場に足を踏み入れることになったのが1997(平成9)年であります。私の勤務する北海道厚生連から、旭川市から東北東に137km離れた人口約18,000人の遠軽町の病院に院長として赴任することを命ぜられました。この病院はベッド

数370で、12の診療科を有する地域中核病院でした。医師数は38名、1日の平均外来数は1,100名、入院患者数は平均320名/日、平均在院日数も19日とまあまあ地域住民からの信頼もあり、それなりにその役割、責任を果たしておりました。とはいえ、遠軽町を中心とする7カ町村の医療圏はたいへん広大な面積を有し、総人口も40,000人弱で、交通機関の便も極端に悪く、通院の患者さん方にたいへんなご苦勞とご不便をおかけしてしまいました。そこで、赴任して2年経ったころ、少し時間的余裕もできましたので、私自身の外来診察日が月・水の週2日で、午後は空いていることもあり、系列の一般病院が20~40km離れた町に3つあるものから、火・木・金の午後2週ごとに皮膚科の診療応援に行くことにしました。実際やってみますと、予想以上にとくに高齢者、学童に大いに喜ばれ、1~2カ月も経ったころ、外来数は半日で50~60名にも達したのです。一方、時代とともに周辺の医療環境も激変し、当院以外にたった2軒あった民間病院が不正請求などで閉院の已む無きに至り、加えて診療所を営んでいた先生方も体調を崩したり、高齢を理由に相次いで医院を畳むことになったのです。この結果、それだけでなくも医師不足に悩んでいた郡市医師会も会員が75名から68名に縮減し、しかもこのうちの44名がB会員である遠軽厚生病院およびその系列病院の医師であり、これが約64.7%を占めるといふ異常事態になってしまいました。ためにA会員からの強い要望もあり、小生がこの郡市医師会の会長を引き受けることとなり、定年で遠軽町を離れるまでの2年間を務めさせていただきます。さて、定年後は旭川市に戻り、自分なりにリセットした皮膚科医生活を考えていたのですが、この3系列病院の皮膚科診療の問題もあり、北海道厚生連から囑託で札幌厚生北野病院の院長としての勤務を要請されました。恩返し気持もあり、お受けすることとなり、結局、札幌市医師会に転入会することにもなりました。

早速、札幌厚生北野病院でも皮膚科診療をしたく、その要請を札幌市医師会に提出しました。しかし、詳しいことは省きますが、この病院の開設

の時の北海道医療行政との絡みや、周辺同業者からの反対も強く、通常の診療は頑として跳ねられ、より限定的な診療のみが許されたのでした。それにしても、近年北海道でも地域から医師が撤退し、札幌市など都会へ雪崩的に回帰していく現象は他県と同様です。しかも札幌市医師会の会合などに行きますと、必ず医師会役員の誰もが「地域医療」を口にします。しかし、役員の中で過去に辺地または過疎地の医療を経験したことのある人など1人もいないのです。私がこの言葉に腹立たしさを覚える由縁です。